



夏季実技講習 心理リハビリテーション

岡崎市特殊教育推進協議会・昭和56年10月30日発行



## 求める心

特殊教育部長

長坂 一昭

ひと鉢の大文字草をいただいた。陽当りのよいところに置く。だんだんと緑濃い立派な葉が色あせ、枯れてくるではないか。本の不足であろうと思い、朝夕水やりを欠かさなかったが、いっとうに葉は緑を濃くしてきません。こうした状態に反比例して、可憐な白い大という字に咲く花を見たいという気持ちがつのってくる。

たまたま友人にさそわれて、奥三河へ行く機会を得る。山道の清水の流れる傍らに大文字草の群生を見る。わたしには見るといふより、発見したといった方がふさわしかった。樹木が繁茂する湿地に群生している。これで、家でも咲かせることができると思う一瞬のひらめきは、よろこびとなって広がってきた。家に帰ると早速、半日陰の場所に移し、水をたっぷりやる。一週間程すると葉の色はようやく濃い緑に変化してきた。これがまたよろこびであった。

教育に思いを馳せるとき、わたしはこの些事に、教師に共通する心の源流を再確認させられる。目の前の子どもたちを「どうすればよいか」という思いは、いつか「こういうことだったのか」「こうしてみよう」という指導の手がかりや理解を深める事象を発見させてくれる。こうした実践を自分だけの教育の成果とせず、機関誌「かいはつ」や研究会など機会あるごとに報告しあっていきたいものである。障害児の指導は、より「その子、その子にあった指導や助言」が求められる。わたしたちは力を合せ、すこしでもその子にあった指導を求める行者として精進したいと思う。

# 継続は力なり

## ペープサートで楽しい学習

K児の読み指導を通して

矢作東小 横井吉明

鳥居裕子

加藤敬子

入学当初のK児は、話すことが好きで単語の羅列ではあるけれどとてもよく話をしました。世話好きで人の世話ばかりやき、反面何をすることも一番でないと

気がすまず、どうかして負けるとねころび「だめだあ。」の連発でした。ひらがなは、自分の名前七文字以外は全く読めず、もちろん書くこともできません。そこで、五十音の獲得から始めようと思い次の手だてを考え実践してみました。  
・ひらがなカード拾い  
・ことばあそび

### 文づくりと一文読み

本年度の四月になりなんとか短い文でよいからスラスラと読んで欲しいとの願いより、文づくりや一文読みをはじめました。文づくりは、主語と述語のカードを用意しておき、それを正しく並べます。並べた文を読むのが、一文読みです。読んだり、書いたりくり返して、毎日毎日つづけました。でもまだ、拗音が入ったり、濁音、促音が入るとつつかえてしまう状態です。

### 動作化

K児は、字もあまり読めないころより物語が好きで、絵本など見ては、文を自分で作ってしまっほほどでした。そんな面を利用して、短いことばを覚えさせるために学習に動作化を多くとり入れました。ペープサートなどを使った動作化は、大変喜び楽しく学習できます。ただ文を読むより効果があり、短いことばなのですぐに覚え生活の中にも浸透していきます。  
一つことを達成するには、家庭の協力なしでは、決してありえないことだと思っています。



動作化で楽しい学習

・まね書き、  
なぞり書き  
結果昨年度の一月末ごろまでは、ひらがな五十音が全部読み書けるようになってきました。次にことばとしてとらえられるように、文が読めるようにと進めなければなりません。

私の担任する二年八組は、男子ばかりの五人のクラスです。新任で、まだ何もわからない六月のある朝、教室に行くと、教師用の椅子の背もたれが一部分破れていたのです。日頃から、清掃の時などに、子ども達が喜んですわっているのを知っていた私は、  
「誰がやったんだ。」  
と、声を張り上げました。

### 怒っちゃいかんよ

矢北中

小野隆彦

「先生、だからあんまり怒っちゃいかんよ。」

「先生、僕達じゃないよ。」  
Hが、心外であると言わんばかりに答えました。  
「じゃ、誰なんだ。」  
「そんなこと、わからん。」  
犯人がわからないまま、いつも教えられました。

### 十一名の新委員で

### 就学のための教育相談

本年度の「就学のための教育相談」が十月から始まった。

就学指導委員会の先生方は

岡田病院副院長 井上恭夫氏

愛知教育大助教授 池田勝昭氏

杉浦小児科医院長 杉浦寿康氏

岡崎養護学校長 鈴木拓郎氏

安城養護学校長 榊原美文氏

岡崎児童相談所 坪井重信氏

岡崎市福祉部 河村芳子氏

竜海中学校長 渡辺尚三氏

六名小学校長 稲垣 茂氏

山中小学校長 長坂一昭氏

教育委員会 藤井 清氏

以上十一名の先生方によって

相談・助言が行われる。毎年、約六十名位の方が相談にみえる。



### モンキーパーク

井田小 五年

犬山のモンキーパークへ行きました。さるがいったいいいました。小鳥のような小さいさるがいました。岩のような大きなゴリラがいました。ぼくたちが、いくらよんでも、しらん顔でいねむりをしていました。もういちど大きな声で、「きりつ」と

### 病氣

連尺小 五年

言ったけど目をさまして立ちませんでした。こんな大きいゴリラを見るのははじめてです。おひるにおすしやおかしを食べていると、さるが手をだして「ちょうだい」をしました。そのよこで、さるのあかちゃんがおかあさんのまねをしていました。かわいい手をぎょうぎよくだしていました。

病氣のやつめ  
また  
わたしの体のそこにいる  
はやく出て行け  
地球の外まで行け  
もう  
二度と帰ってくるな  
もし  
帰って来たら  
たいじしてやるぞ  
(身体虚弱学級在籍児童)



評  
友達のあだ名や性格を感じるので、それぞれの個性がよく出ています。



評  
四匹のうさぎが、もちをついたりしてとても楽しそうなのうすがよくかけました。

### 汝のパンを水の上に

愛知県立岡崎養護学校長

鈴木 拓郎

「だからこそ」この努力目標へ向かって私達は歩みはじめ、歩み続けなければならない。それを地球的規模において誓ったはずである。  
ただ究極において不可能と思われることに全力を注ぐ、とい

うのは二重に疲れる話である。その疲れが時に空しさを覚えさせる。だがそれはほんとうに空しいことであろうか。空しいということ、空しく見えると

の役に立つなら恵んでやろう、というのではない。自分の命を支える程大事なものを、それをし  
かも空しいかに見えることのために投げ出す、という無償の愛

それがこの一節に示された神意なのであろう。  
「こんな子にこんなことをしてやって何になる。税金のムダづかいではないか。」私達のまわりに立ちほだかる壁から、こだまのような声がきこえてくる。  
「関係者」である私達は「こんな子」に直接責任を負っている。一方根気よく壁を押し崩して本来の「人」に還ってもらうためのゆさぶりも仕事の一つに違いない。しかし何よりも自らのためにこそ、パンを水の上に投げ続けるべきではないだろうか。  
(岡崎市就学指導委員)



マユかきに励む生徒

秋蚕を飼育して——  
マユ人形を作る六中生  
「これが、おかいこさん。気持ち悪い。」「ううん、私、かわいいわ。」  
作業学習に秋蚕の飼育を始めた。気味悪がっていたM子も、四令の頃には掌にのせて観察していた。雨の日も休むことなく桑つみに。多い時は一日に四回も出かけた。子供の瞳が輝き、登校が早くなった。全校生徒が交々、観察に訪れた。  
「このマユで人形を作るの。」

# 岡崎特殊教育の歩み

連尺小の養護学級 健康教育の成果を全国に発表

戦後の部

私が担任であった頃

音羽 恒子

健康教育と題して連尺小学校が研究の成果をまとめ発表の機会を得たのは、愛知県学校衛生会共催で東海北陸特殊学級経営協議会が本校で開催されたのが昭和二十四年の九月でした。昭和二十三年に岡崎市学校医



校内床屋でさっぱりと

会から衛生教育研究校に依頼され、又県教育委員会からのご指定で特殊学級研究指定となり、更に文部省内日本学校衛生会から健康教育実験学校の指定を受けた。この頃厚生省で結核白書が出されその対策がたてられているところ、本校健康教育の研究と実践がまとめられた。環境は人を作る。健康なる環境は健康なる人を作る。このことから私たち特殊学級担任者は結核に感染した児童をその発病から護ることを目標として、二月、六月、十二月年三回のツベルクリン検査を行い新陽性転化児童を特殊学級に編入、校医先生の診断の結果一ヶ月経過健康と判定された児童は普通学級へ編入するという学級編成の方法をとっていた。編入された児童については結核に対する環境調査を行い、担任は家庭訪問をし児童によりよい環境を与えるよう心がけてきた。

## 健康六則の作成

特に教室環境には力を入れ衛生習慣を養成するために「健康カルテ」を作成し、保健委員会を設定「健康六則」を作成、校医の指示による陽転児の注意事項を掲示、衛生カレンダー、姿勢図、よい子の食事、よい子の一日を作成し、掲示すると共に毎朝の検温の結果三十七度二分以上の者を有微熱者として赤紙を、他の児童には青紙を渡し「きょうのからだのぐあい」の一覧表に自分の名前の欄に貼付させ、本人の自覚と家庭連絡にやくだたせた。

校医である前川斉先生、志貴彦人先生の誠意で、保健室に於いて血沈も行ない陽転者の身体的な面のご指導を受けた。

## 夏休みの夏季聚落

八月一日から六日まで、十日から二十三日まで計二十日間を夏の保健学校の開設として日課表を作成、教室、藤棚の下、岡崎公園の木陰を利用し学級PTAの協力と他学級の先生の援助を受けて夏季聚落を行なった。

## 日記より おひるね

—公園の藤棚で—  
みんなおひるね うれしいな



式達伝の電話機

## 葵ライオンズクラブ

〈言語訓練用電話機を寄贈〉

国際障害者年を記念して、葵ライオンズクラブより岡崎市特殊教育級へ電話機が二基寄贈された。

伝達式は去る八月十七日に教育長室でおこなわれた。

いま、この電話機は市内十一の小学校特殊教育級で順次活用されている。

## ◆あとかぎ◆

◇会報「かいはつ」第五号をお届けします。

お忙しいなか、鈴木拓郎先生、音羽恒子先生から、国際障害者年の本質にふれるご提言とご報告を戴き、厚くお礼を申し上げます。

◇国際障害者年は特殊教育級の子供達にとって何だろうか。自己要求の術も知らないこの子供達の未来について、改めて全教師が問い直す年の初めではないだろうか。

◇特集「岡崎の特殊教育」に関する写真・資料がありましたら係までお送り下さい。

連絡先 六ツ美中 加藤 潔

TEL 四三二〇七一

だれが一番よい子でしょう、ふじの小枝がゆうらゆら、くつつが並んで待っている。  
手軽な上敷を用意して、午後の午睡の時間を涼しい藤棚の下で行った。  
帰りに藤棚にお礼をいってさようならをした姿が、いつまでも思い出として心に残っている。  
朝夕につつがなかれと祈る子の休みなき日を嬉しく思う。  
私はこんな気持ちで当時の特殊教育級を担任したのだった。

(元連尺小学校教諭)